

シ ナ イ



新
井
宏

二月のカイロの朝は結構肌寒い。シナイ山に登る予定があるので一応の防寒準備はして来たが、あとは半袖ばかりで、何となく中途半端である。旅行社からは、五、六月の支度で参加するように連絡があったというが、私の頭ではエジプトはやはりアフリカの国、赤道のちょっと北くらいに思っていた。しかし緯度を見れば台湾よりもはるか北で、鹿児島のことと南の屋久島あたりである。誤解いや偏見とは恐ろしい。

今日は、シナイ山ふもとのセント・カテリーナまでの移動日。五百キロメートルを超える行程だという。ホテルを八時半に出発する。

大型観光バスにはツアーの一行十四名の他に、日本人添乗員、現地日本語ガイド、ガイド補佐とガイド見習、それに警備の警官などが同乗している。ガイドはひとりだけで十分だと思うのが私たちの感覚だけれど、これもエジプト側の事情によるらしい。とくに警官は、不意に

バスに乗り込んできて、適当に立ち去る仕組みのようだ。大体は、ガイド達と話もせず、毅然とした姿勢で黙って最前列の座席に座り黙って去って行く。

同乗者が多数いるとは言っても、大型バスのこと、大抵はふたり分の座席を占領してゆったり座っている中で、私は妻といつものように隣り合って座る。

エジプトの面積はちょうど百万平方キロで日本の三倍、そこに日本の半分の人口約六千万人が暮している。日本も平野部が十七パーセントしかない山国で世界有数の過密国であるが、エジプトも大部分が砂漠の国で、ナイル河岸と河口のデルタ地帯に人口は集中しているため、かなりごみごみしている。ナイル河口のデルタ地域の始点部分に広がるカイロは東京と同じく千二百万人の人口だと言う。世界の大都市の人口が大体千二百万人前後なのは、偶然の一致であろうか。そこには厳然たる法則があ

るようにも思える。これから向うシナイ半島は、日本の半分くらいの広さで、そのほとんどが砂漠だ。

バスはカイロの中心地から東に進む。前方左の小高い砂岩丘の上に、アイユーブ朝初代の王サラディンが一一七六年に建設した対十字軍用の城砦シタデルが見える。その中には十九世紀になってオスマントルコからの独立を果たしたアルメニア人の異国王モハメット・アリのブルームスクがある。イスタンブールのブルームスクを模して作ったというが、城砦には似つかわしくない。

砂岩丘との出合いがナイル河の恵みとの別れになり、ここから砂漠が始まる。さらさらとした砂の砂漠ではないが、草木は全く見られない。ただその中を、送電線だけが縦横に走っている。シナイ半島の石油で発電してカイロに送っているのだろうか。それにしてもその無秩序さが異様である。

ところがその理由の一部が間もなく判明した。砂漠の中のあるところに、団地が建設されているのである。どうやって水を引いているのか判らないが、大きな給水塔の周りに中層建てのアパート群が見える。カイロ旧市街地のはずれから車で三十分以内のところにあるので新興住宅地という位置付けなのであろうか。それにしても、荒涼とした砂漠を見ていても、つぎからつぎへと疑問が生じ飽きることがない。

途中の休憩所には、従業員がたったひとりいて、売店をやりながらトイレ番をしていた。エジプトではトイレのチップがとても煩わしいが、このような水不足の地のトイレ番にはちょっと弾んでも良い気持になる。それにしてもまわりには何も無い。住居が付いている様子がないので車で来て店番をしているのであろう。

シナイ半島との境界にスエズ運河がある。日本語ガイド氏によれば、スエズ運河を越えてシナイ半島に入るとそこはもうアジアだという。オリエント（東方）をアジアというならば別に間違いではないが、アジアの中心を中国あたりだと思っている感覚からすれば、近東、中東などと言われてもアジアを連想することが出来ない。

スエズ運河については、何となく港町風の賑わいを想像していたが、バスは一九八二年にできた地下トンネルを通してあっと言う間に通りぬけてしまう。地図で見ると運河の最も南の部分を通過したようだ。運河の岸辺でゆっくり休憩してその仕組みを見学できると期待していたのに、ガイド氏は運河の歴史さえ説明してくれない。それでも観光客への最低限のサービスのため、運河がやっと思えるところまでバスを移動してくれた。しかし下車はもとより停車しての写真撮影も認められない。

そういえば、スエズ運河は当然のことながら軍事上の機密なのだ。それにしても毎日数百隻の船舶が行き交う

中で、観光バスに対してだけ厳しくしても仕方がなからうに思う。しかしここはエジプトにとっては特別な戦場なのである。

ナセル率いる自由将校団が一九五二年にクーデターで英国影響下のモハメット・アリ王朝を倒したのが始まりであった。ナセルは国民生活水準の引き上げをめざし、世界銀行からの融資と英米からの借款を受けて、アスワン・ダム建設の建設に乗り出した。それはエジプト五千年の歴史を一変するほどの壮大なプロジェクトであった。ところがその後、米国は突然この借款を反故にしてしまった。ナセルの親ソ政策に米国が嫌気を出して露骨な制裁行為にでたのである。いつもの米国の論理であった。

しかしこのことがエジプトにスエズ運河の国有化のきっかけを与えることになってしまった。ナセルは一九五六年に資金調達の道を求めて、当時イギリスとフランスがその株式の大半を所有していたスエズ運河株式会社の国有化を断行する一方、イスラエルに対する優位を確保するため、アカバ湾の封鎖に踏み切ってしまうのである。

当然、戦争となった。イスラエルと英仏は共同して直ちにエジプトに攻め込む。第二次中東戦争の始まりであった。(ちなみに第一次中東戦争はイスラエル建国時に起きている)。軍事的にはイスラエルや英仏の圧勝であったが、この頃から力をつけてきた国際世論という武器が

エジプトに味方する。米ソの力の均衡の中で、国際世論が機能して米ソも仲介に動かざるを得なくなる。これが国際政治の面白いところであった。結局、ナセルの外交が勝利してスエズ運河はエジプトのものとなる。

その上ナセルはシナイ半島そしてスエズ運河を守るため、いやイスラエルそのものを取り除くため、一九六七年になるとイスラエル侵攻を目論みシナイ半島に軍を集結させる。同時にシリアもゴラン高原に軍を集結させた。そしてまさに侵攻体制が整い、イスラエルに侵め入ろうとしたその時、エジプト空軍基地はイスラエルの奇襲空爆により、一夜にして空軍機の大半を失ってしまった。この第三次中東戦争の結果、エジプトはシナイ半島を失ってしまう。

シナイ半島を失ったスエズ運河がイスラエルから直接脅威を受けるの自然の成り行きで、運河を挟んでの消耗戦が勃発するのは時間の問題であった。紆余曲折はあったが、第四次中東戦争、第五次中東戦争を経て、ナセルの後継者サダトが、宿敵イスラエルと手を結ぶと言う離れ業でシナイ半島をやっと取り戻すことに成功する。このサダトの行為はイスラム教国に対する背信行為と非難されているが、これはかつてベネチアがキリスト教国を裏切ってしばしばトルコと結んでいた現実主義を彷彿させる。

サダトはあらゆる意味で典型的な現実主義者であった。

現実主義者が敵味方を問わず理想主義者から憎まれるのは宿命である。サダトも暗殺により倒されている。

いまサウジアラビアのアブドラ皇太子の和平提案が大きく注目されている。アラブがイスラエルを承認するかわりにイスラエルに占領地から撤退を求めるという提案である。アラブも変わりつつある。いや変わらざるを得ないのが現実なのだ。

遠くから垣間見た運河は幅が五百メートルほどあろうか、海水の青白色が砂に映えていた。当初の幅は二十二メートル、深さは八メートルであったというから、通航船舶の増大や大型化に合わせて絶え間なく開削が続けられてきたのであろう。総長は百六十八キロである。

フランスの外交官でカイロ領事であったレセップスがスエズ運河をつくるための株式会社を設立したのが一八五八年であった。これが国の公共事業などではなく純民間の株式会社によって行われたことが時代の特徴を物語っている。

そういえば東洋を支配したオランダもイギリスもその母体は東インド株式会社という「株式会社」組織であった。利益を求めて株を買うという、この最も古典的な資本主義の風潮がまだ続いていた。運河は十二万人の死者を出すという過酷な工事のすえに一八六九年に開通する。明治維新の翌年であった。だから岩倉具視の遺米欧派遣

団は帰路ここを通る。

約四十万株発行された株式の内、エジプト政府が十八万株弱を、その他はフランス人を中心としてヨーロッパ人が買い入れている。ただし、この時イギリス人は一株も申し込んでいない。この頃イギリスはスエズとアレキサンドリアの間に鉄道を敷設しており、その権益に大打撃をうけるから運河の建設に大反対であった。

しかし結果としてスエズ運河を一番利用したのが英国船であった。英国はスエズ運河の権益を狙って水面下で動き出す。そして早くも運河開通の六年後には、多額の借金で首の回らなくなっていたエジプト王朝からその持ち株の全てを買い取る離れ業を行う。価格はわずかに四百万ポンドであったが、フランスは普仏戦争に破れた直後でとても余裕がなかった。英国はその後エジプトの内乱に生じエジプト自体の実質的な支配権を手に入れ、ナセルの革命までエジプトの実質支配を続けることになる。

運河に沿って十分ほど南下すると紅海が見え始め、ほどなくアイン・ムーサにつく。モーゼがユダヤの民六十万人を連れて、エジプトを逃れカナン（パレスチナ）に向かう途中、海を割って紅海を渡り、初めて砂漠で野営したところ。水に飢える中で、モーゼが杖をつくとも泉が湧き出たと伝えるオアシスである。

オアシスと言うとロマンチックな緑の豊かさを想像す

るが、椰子の木が百メートル四方に点在するだけの実に殺伐としたところで、ベトウィン族の女や子供が粗末な屋台で土産物を売っていた。あまりの貧しさに目をそむけながら足早に通りすぎてしまったが、そのことに気がとがめ心楽しまない。

昼食は紅海海岸バナナビーチのレストランで採る。海岸とはいっても周囲は全て砂漠。そんなところにリゾートの宿泊設備がつくられている。誰がやって来るのであろうか。

午後バスはひたすら砂漠の中を南下、二時間ほどすると、周囲は砂砂漠から石砂漠そして岩砂漠に変わり、山岳砂漠が見えはじめる。日本語ガイド氏が近くにワディ・ガランデル（ガランデルの谷）というとても緑の美しい渓谷があるので、わざわざ立ち寄ると言う。期待していたが、やはり全くイメージが異なる。砂漠の砂壁に沿って数百メートルほど湧き水の小川が続き、その周りに灌木がわずかに茂っているだけのオアシスである。そもそもこんなところに日本の渓谷を思い浮かべる方が間違っているのであるが、水や緑に対する基準があまりにも異なっているのに苦笑する。

それからまた一時間ほどでワディ・フェイランに着く。ここもモーゼが岩を杖で打って水をほとばしらせたレピデムの奇跡の場所だと言う。もう山岳地域に入り山間の平地に椰子やアカシヤの樹が散在するオアシスで「シナ

イの真珠」と名付けられていると言う。しかし標高が上がったことや山間で日がかげってきたため、かなり肌寒く荒涼とした感じである。

こんな殺伐としたところにもベトウィン族が生活している。どうやって生業を立てているのであろうか。それにしても、ひとはなぜこのようなところに住まなければならないのであろうか。しかもそこが「シナイの真珠」と言われている。理解を超える。

このあたりからバスは完全な山岳地帯に入る。しかし日本の山岳道路とは全く異なり、登り降りがほとんどない。あたかもダム上の水量豊かな山間の湖水上を舟で漕上しているかのようなのである。そうなのである。砂漠では砂が水なのだ。ここでは山間が全て砂で埋め尽くされ、それが奇妙に谷間を縫って奥へ奥へと続いている。まるで砂の氷河だ。太古の昔に大洪水でもあったのであろうか。

セント・カテリーナのホテルには五時半に到着した。標高が千五百メートルあるのでとても寒い。聖地シナイ山の麓にあるだけに完全な観光地ホテルであるが、途中でお湯が出なくなるのでシャワーだけにした方が無難だという。それにしてもどうやって水を確保しているのであらうか。余計なことを心配してもはじまらない。

シナイ山ではご来光を拝む計画である。六時過ぎの日

の出にあわせて、三時には出発しなければならない。早めにベットに入る。

日本には百名山症候群に罹った中高年が大勢いる。ひたすら深田久弥の書いた百名山を完登することだけを目標にして、紅葉映える山に春のぼり、花萌える山に秋のぼるマニア達のことである。それが嵩じて最近では世界百名山を目指すものさえ現れた。どんな基準で選んでいるのか知れないが、深田久弥の言うように、山に歴史や信仰を求めるとすれば、このシナイ山は絶対に欠かせない。何と言っても、ユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教の生まれ故郷、モーゼが神から十戒を授かった聖山なのだ。

標高二二八五メートルのシナイ山山頂までは七百メートル強の登りである。もちろん希望者だけの登山であるが、山頂近くまでラクダに乗っても行けるので、十人ほどが参加する。半数はラクダ組のようだ。もちろん百名山症候群の一步手前の私たちは歩いて登る。第一この登山があるのでエジプト旅行に心が動いたのである。

バスで登山口まで移動し、三時半ごろから暗闇の中をゆっくり登り始める。懐中電灯の光では足元しか照らせないが、ラクダの早さに合わせて結構急いで登る人達が私たちを追い越して行く。急ぐことはないのだ。そんなに急いだら寒い頂上で長時間待つことになるだろう。

登山列はほとんど切れ目無く続いているようだ。それでも途中でラクダに乗れとしつつこく寄ってくるところを見るとこの日は空いている方なのであろうか。途中には四ヶ所ほどの休憩所があり、挨拶を交わすと大抵どこから来たのかということになる。ドイツ人やフランス人が多いなかで、イスラム教徒たちも目立つ。英語はあまり聞えて来ないが、韓国人やマレーシアの団体もいて、実に国際的である。

登り始めたころには、くっきり見えていた夜空の星が、いつの間にか消えて、雪がちらつき始めた。砂漠の山にも雪が降る。予想もしていなかったが、異常なことではないのだという。温度計を見ると零下五度であった。途中の休憩所で時間を調節しながら登るが、やはり頂上で大分待つ事になった。

じっとして待っていると結構冷える。中には軽装で登ってきた欧米系のグループもいる。一般的に彼らの服装は暑さ寒さに無頓着であるが、それにしても寒いだろうに。太っているので芯まで冷えることはないのだろうか。

日の出の予定時間を過ぎて大分明るくなってきたが、周囲は何も見えない。雪というよりは雲の中であった。砂漠はいつも晴れと単純に思い込んで、ご来光を拝めないことなど予想もしていなかったことにまた苦笑する。

頂上には教会とモスクがあった。教会はユダヤ教のものだと説明があったが、屋根には十字架が立っている。

第一ユダヤ教は教会ではなくシナゴークなので、これはおそらくキリスト教のものだと思うが、ユダヤ教もキリスト教も、それにイスラム教さえもシナイ山のモーゼに始まるのであるから、説明通りなのかも知れない。

モーゼがエジプトを脱出し、シナイ山で十戒を受けた頃、すなわち西暦前千二百年代は、歴史に光が当たっていた。エジプト史上最大の帝王ラムセス二世の時代であった。

エジプトの観光をすれば、いやでもラムセス二世の名前だけは覚えてしまう。この自己顕示欲の旺盛なラムセス二世は帝王の座に留まること七十年余、その間カイロからルクソールそしてアスワン上流のアブシンベルまで、至るところに神殿を作り、夥しい数の巨大なラムセス二世像を残した。また、その最愛の妻ネフェルタリは、ルクソール王妃の谷にある彼女の墓に、最も保存のよい状態で壁画にその美しい姿を留めているばかりでなく、アブシンベル小神殿の主としても知られている。旧約聖書のモーゼがヘブライ人の開放を求めたのもラムセス二世に対してであり、またモーゼを紅海に追い詰めたのもラムセス二世とネフェリタリであった。映画「十戒」はチャールトン・ヘストン演ずるモーゼを軸にユル・プリンナーのラムセス二世とアン・バクスターのネフェルタリが絡んで進行する大スペクタクルである。

この頃の大きな出来事はそればかりでない。古代の最大の戦争、カデシュの戦いはアンタキアのアロンテス河畔でヒッタイトのハットウシリ三世とエジプトのラムセス二世の間で戦われた。ヒッタイトとはかってまったく謎の民族であったが、旧約聖書のヘテ人のことであり、彼らによって人類は始めて鉄を使用するようになったと言うのが今日の定説である。その首都は中央トルコのハットウシャシュにあった。

しかし遺跡を比較するかぎり、ヒッタイトはあまりにもエジプトに見劣りする。整然とした巨大な神殿を数多く残したエジプトに対して、ヒッタイトの城砦は強固かも知れないが、あまりにも粗末で貧弱だ。鉄を持つ民族の威力とはいえ、良く対等に戦ったものだと思う。

実はカデシュの戦いはラムセス二世がアブシンベル大神殿に書き残したようなエジプト側の大勝利ではなかった。そのことは二キロ以上離れたヒッタイトの故地からその講和条約の文書が出土したことからわかったのである。まさに歴史考古学の醍醐味であった。為政者が戦争に勝ったと宣伝するのはいつものことであるが、この古代の大戦争は結局引き分けだったらしい。そういえば、有名なツタンカーメンの王妃アンケセネアメがヒッタイトの王子に婿入りを要請したこともあり、ラムセス二世の妃のひとりにヒッタイト王女を迎えたとの記録もある。だからヒッタイトが強国であったのは間違いないのだが、

どうもその文明の落差が気になる。まだトルコのどこかに埋もれたヒッタイトの壮大な宮殿があるように思えてならない。

モーゼの「出エジプト」は、まさにそのような国際情勢のもとで起った事件であった。ユダヤの民がエジプトに入る前に住んでいたのが、このエジプトとヒッタイトの勢力が対峙した地域であり、カデシユの戦いの帰趨が、彼らをエジプトから里帰りさせる動機のひとつになったのではないか。このように勝手に歴史を考えるのが楽しい。

ところで我々に最も判りにくいのが宗教である。

いま世界で一番激しく対立しているのが、アラブとイスラエルすなわちイスラム教徒とユダヤ教徒である。だから、イスラム教徒もユダヤ教徒も共にモーゼを預言者として崇めていると聞くと非常に違和感がある。もちろんキリスト教もモーゼを崇める。いずれの宗教も一神教だということは知っていても、何となくそれぞれが別の神を、唯一の神として崇めているのだと思ってしまうのが日本人である。ところが、これらの宗教では、神は全て唯一すなわち同一であり、ただその預言者に対する認め方が違うのだと言う。

ユダヤ教はモーゼだけを預言者として認め、イエスを預言者と認めていない。キリスト教はモーゼとイエスを

預言者と認めるがマホメットを認めない。イスラム教はモーゼもキリストもマホメットもみんな預言者として認める。このような関係から見ると、イスラム教徒が一番寛大なようにも見えるが、現実の世界ではそうとも受け取りがたいことが多い。

モーゼの十戒は「我は汝の神なり、我の他に何者も神とすべからず」で始まり、偶像崇拜の禁止と神の名を唱えることの禁止と続き、道徳的な規定すなわち「父母を敬うべし」「殺すなかれ」「姦淫するなかれ」「盗むなかれ」などは四戒から始まっている。旧約聖書、新約聖書を旧訳とか新訳と思い勝ちな日本人に対して、約とは神との契約のことだと言われても何も分った気がしない。それにしても神の名を唱えるなどか、神の偶像を作って崇拜するなど言われて、ますます判らなくなるばかりだ。だからこれらの宗教では「神の名」も良く判らない。エホバとかヤーウェとかアッラーとか言われているが、唯一でしかも唱えてはいけないのだから、名前はなくとも良いらしい。

十戒を授かったシナイ山を下り始めるころから、雲が流れて周囲の山々が見え始めた。奇形としか言いようもない山なみが朝日を受けて、紅がかった褐色肌を浮き上がらせる。暗闇の中、左右も分らず登った登山道も眼下に一望できる。大きな山塊だ。樹木らしいものは全く見

当らないが、それでも山の窪みに墓の象徴と言われる系杉を一本見つけた。雪が降るのだから樹木が育っても不思議ではないが、その系杉がかえって荒涼とした景色を際立たせる。神はなぜこのような厳しい環境にモーゼを導いたのか。モーゼはなぜカナンの地に直行せず、四十年もこの厳しいシナイの地に留まったのか。

山を降りた所にギリシャ正教のセント・カテリーナ修道院がある。造りは完全に城砦だ。事実、ユスティニアヌス帝が五三〇年に外敵からキリスト教徒を守るため築かせたものだと言う。それにしても、こんな荒廃した地に誰が攻めてくるというのであろうか。

ホテルに戻って、遅い朝食を採ってから、十時半にシャルム・エル・シェイクへ向う。南下と標高降下で急速に気温が上がり始める。

シャルム・エル・シェイクはシナイ半島の南端東側に位置する。五つ星ホテルが二十もあるエジプト第一の観光地だという。ここをそういうなら、ピラミットのギザや神殿のルクソールは何なのか。それにしても全くエジプトを感じさせない砂漠の観光地だ。どこかラスベガスやフエニックスに似ていてアメリカ的な雰囲気漂っている。イスラエルがシナイを占領していた時に開発した街だと聞いて納得する。

ここから車で三十分のところはラス・モハメットがあ

る。一九八三年にエジプトで初めて国立公園に指定されたところで広大な砂漠と海の楽園だという。

小型バスに乗り換えて、町並みを出るとまもなく検問所らしいところに至る。はたして検問所であった。ガイド氏がバスホートを準備して見せるように言っている。最初は冗談だとばかり思っていたが、係官が形式だけだけれど車に乗り込んでチェックを開始した。なぜこんな広大な国立公園に入るのに、バスポートのチェックが必要なのか、全く理解できない。軍事基地が近くにあるとも聞くが、国立公園内にあるわけでもない。しかしイスラエルから取り戻したシナイ半島の象徴、イスラエルが造った街シャルム・エル・シェイクは軍事緊張の最前線でもあるのだと考えて納得することにした。

ラス・モハメットの国立公園内は小型バスで走り回れる。別に観光客が多いくる様子はない。徹底的に自然を保護しているとの説明にも、こんなに人がいないところで、自然の保護も何もいではないかとまたひとりつぶやく。緑あふれる日本の基準で見ると大味過ぎてどこにその美しさのよりどころを求めて良いか戸惑うが、まばゆい紺碧の海と白茶紅色の砂漠があざやかな対照は自分ひとりのための物のように思えて心なごんだ。ここは世界的なダイバーのメッカというから、海底には自然の楽園が見られるのであろう。適度に散策してシャルム・エル・シェイクのホテルに戻る。長い一日であった。

ここシャルム・エル・シェイクは、イスラエルとパレスチナの和平交渉の主舞台であった。ノーベル平和賞まで受賞した一九九三年のオスロ合意が、何とか生命を保って、一九九九年七月のパラク首相の登場を迎え、本格的な和平合意に向って歩みだしたのも、ここシャルム・エル・シェイクであった。

バラク首相は軍人出身でありながら、柔軟で現実的であった。だから国民が嫌う妥協を重ねても、和平合意に達しようとした。それを見て百選錬磨のアラファト議長が対応を誤った。更に譲歩をとせまり、イスラエルの世論を一気に右傾化させ、逆にバラクを追い込んでしまった。そして右派政党リクードの党首シャロンの登場を呼び、歴史が暗転してしまう。

シャロン党首はまずイスラエル国民の支持を背景に、二〇〇〇年九月イスラム教聖地、ユダヤ人にはタブーの東エルサレムを訪問し「ここはイスラエルの地だ」とぶち上げ、イスラエル治安部隊とパレスチナ住民の衝突を惹き起こす。第四次中東戦争の英雄で、バラクをして「シャロンが首相になったら平和を保つことが出来るのは神様しかいない」と言わしめたほどの強硬派であった。

しかし国民は変化を求めている。短期間のうちに強硬策で和平をもたらすという公約が圧倒的多数で支持され、シャロンは二〇〇一年三月には首相の座につく。そして

徹底した強硬政策をとり、和平交渉を一方的に中断してしまう。

不幸が続いた。僅差で登場したブッシュはクリントンの決定事項でさえ無視し、京都議定書を反故にし、期待を裏切りシャロンのやり方を暗黙の内に支持し始める。テロそして報復の悪循環がエスカレートせざるを得なくなった。同年の九月十一日の米国同時多発テロはこのような状況で起ったものだ。ブッシュが登場しなければ、いやシャロンが登場しなければ、流れは異なっていたであろう。アフガニスタンで多くの人達が亡くなることもなかったかも知れない。

いつの時代、どの地域でも国民は問題解決に判りやすい強手を求める。やって見てダメなら別の馬に乗れば良いと、無責任に考えるのが民衆だ。だからイスラエルの国民がもうシャロンを見限り始めたのは確かである。

「テロを止めるという公約も、不況を終わらせるという公約も、和平を進めるという公約もすべて失敗した」と零点の評価を公然とつけ始めている。高い月謝であった。だからブッシュのテロ支援国家への強硬策もいずれば内部から破綻するにちがいない。強硬策はマルチ商法と同じで、いつまでも拡大させて行くことはできないのだ。

広い敷地にコッテージ風な部屋を散在させたリゾートホテルはエジプトの雰囲気を感じさせない。夕食時のス

テー ジ音楽も耳慣れたジャズやシャンソン、タンゴや日本の音楽である。こんなシナイ半島のはずれまで来る日本人がいるのだろうか。自分が日本人であることを棚に上げて余計なことを思う。明日はシナイを離れ、飛行機でルクソールに向う。ナイル遡上の船旅が待っている。

